

# 文系大学生の情報リテラシーの現状と課題

飯嶋香織\*1・井内善臣\*2・山本誠次郎\*3

\*1: 神戸山手大学 現代社会学部

\*2: 兵庫県立大学 経営学部

\*3: 特定非営利活動法人 ひょうご・まち・くらし研究所

◎Key Words 情報リテラシー, 情報教育, 大学生

## 1. はじめに—研究の目的

近年のパソコン、携帯電話、スマートフォン、タブレット PC などの急速な広がり、それと同時に、新しい通信技術やインターネットの普及とともに、SNS などの新しいコミュニケーションツールの登場し、情報機器の利活用のスタイルは大きく変化をしている。

そういった中で、文系大学生の情報リテラシーの現状はどうなっているのでしょうか。文系大学生であっても、性別、パソコンの所有状況などによって、新しい情報機器を使いこなす人たちとそうでない人との偏り、すなわちデジタルデバイドが見受けられる(1)。

パソコンをはじめとする情報機器の利活用、デジタルデバイドの解消のためにも、大学の情報教育はどういった内容が求められているのでしょうか。

本報告は、文系大学生に限定して、大学生の情報リテラシーの現状と課題などをあきらかにすることである。

まず、情報リテラシーとは何かについては、『平成 10 年版 通信白書』によれば、「情報機器の操作などに関する観点から定義する場合(狭義)と、操作能力に加えて、情報を取り扱う上での理解、更には情報及び情報手段を主体的に選択し、収集活用するための能力と意欲まで加えて定義する場合(広義)がある」としている。この定義によれば、「狭義」の情報リテラシーは、パソコンを対象と考えれば、「コンピュータ・リテラシー」に近いと考えられる。

※ 携帯電話、スマートフォンなどのモバイル機器の操作などに関する狭義の情報リテラシーもあるが、本報告では対象にしていない。パソコンのみを対象にしたのは、大学での情報教育がパソコン中心に実施されているからである。

## 2. 調査研究について

### 2.1 調査研究の目的

本報告は、平成23年度 兵庫ニューメディア推進協議会 調査研究報告書『若年層の携帯電話、スマートフォン及びパソコン利用と情報リテラシーとの関係に関する調査

研究』のデータ(2)の再分析である。この調査は主に文系大学生の情報リテラシーの現状と大学での情報教育の内容や課題についての調査研究である。

### 2.2 調査の概要と回答者の属性

本報告は、前述の調査の再分析である。調査対象、実施時期などは以下の通りである。

調査対象：兵庫県、大阪府にある大学(短期大学も含む)のおもに文系学部の学部学生

調査時期：2011 年 12 月

調査方法：授業で配布して回収

調査対象の大学数：8 大学

回答数：715 人

分析のために、回答者の属性が揃っていた方が良くと考え、以下のような条件に限定することにした。

- ・ 10 歳代、20 歳代の 4 年制・短期大学の学生
- ・ 留学生を除く
- ・ 携帯電話かスマートフォンのいずれかあるいは両方を所有している。
- ・ 文系学生(理系の学生を除く)

のみを今回の分析の対象とした。

その結果、サンプル数は 573 人となった。

### 2.3 回答者の属性

図表 1 男女比

	人数	%
男性	233	40.7
女性	340	59.3
合計	573	100.0

図表 2 年齢

	人数	%
10 歳代	288	50.3
20 歳代	285	49.7
合計	573	100.0

図表3 学年

	人数	%
1年生	262	45.7
2年生	157	27.4
3年生	126	22.0
4年生	28	4.9
合計	573	100.0

### 3. 大学生の情報リテラシーの現状

#### 3.1 コンピュータ・リテラシーの現状

文系大学生の情報教育は学部の1,2年次に実施されていることが多い。しかし、3年次以降になってからも、パソコンでのプレゼンテーションの仕方や、論文・レポートの書き方などのさらなる情報リテラシーの向上のための情報教育が必要である。

情報リテラシーについて、前述の『平成10年版 通信白書』から、「情報機器の操作などに関する観点から定義する場合(狭義)の情報リテラシー」は、情報機器の一つである、パソコンに関していえば、「コンピュータ・リテラシー」に近いと考えられる。まず、この「コンピュータ・リテラシー」の現状はどうなっているのであろうか。その結果が図表4である。

インターネットやワードの基本的操作は多くの学生が出来るが、パワーポイントやエクセルになると出来る学生が減少し、さらに画像の加工や周辺機器の設定などになると、できない学生が多い。

#### 3.2 広義の情報リテラシーの現状

前述の『平成10年版 通信白書』の情報リテラシーの広義の定義である、「操作能力に加えて、情報を取り扱う上での理解、更には情報及び情報手段を主体的に選択し、収集活用するための能力と意欲まで加えて定義する場合(広義)がある」についてはどうであろうか。

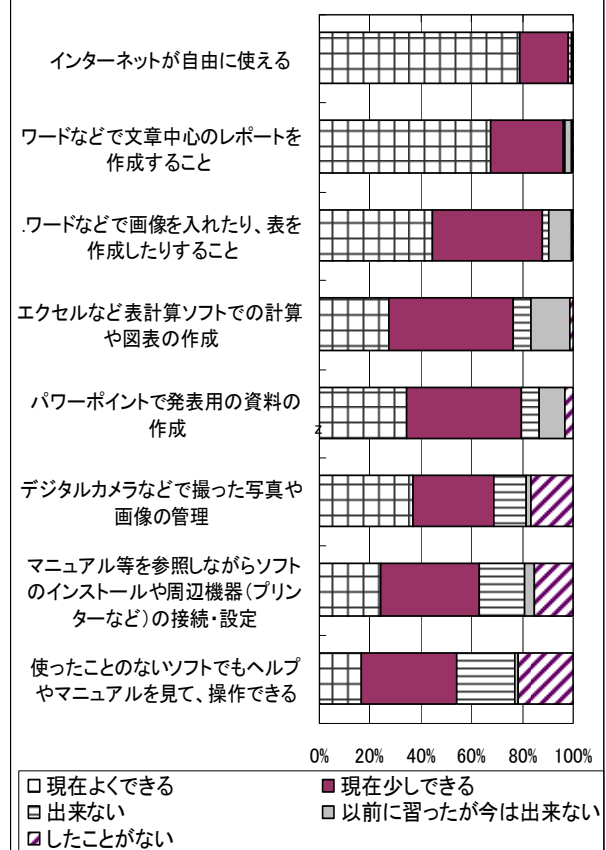
その点については、図表5である。「本や資料や新聞などから集めた情報については真偽を確かめることを学んだ」と「インターネットから真偽を確かめることを学んだ」は約半数で、低い傾向が見られる。

#### 3.3 大学の情報教育の現状

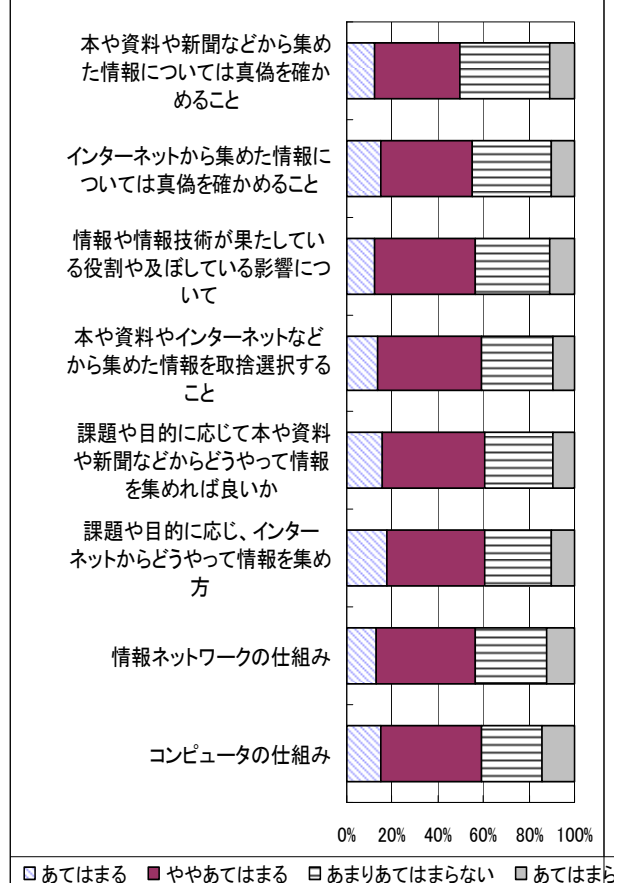
では、大学での情報教育について、文系大学生はどのように思っているのであろうか。その結果が図表6である。

「情報教育の内容は知っていることばかりである」と回答したのは、約3割であった。また「自由に利用できるパソコンが少ない」などの設備面などでの不満は少ないといえる。

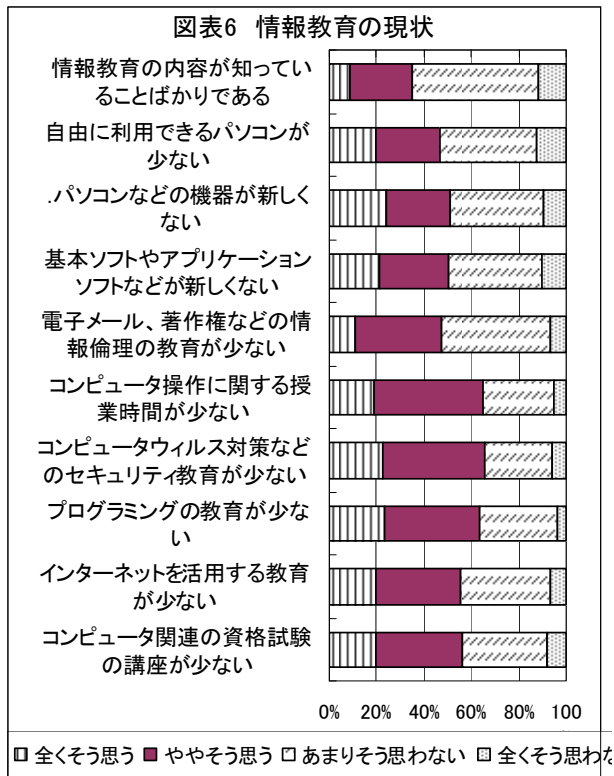
図表4 コンピュータ・リテラシーの現状



図表5 大学で身についたこと



ただ、「コンピュータ操作に関する授業時間が少ない」「コンピュータウイルス対策などのセキュリティ教育が少ない」「プログラミングの教育が少ない」などと感じているようである。



### 3.4 学生が情報教育に望むこと

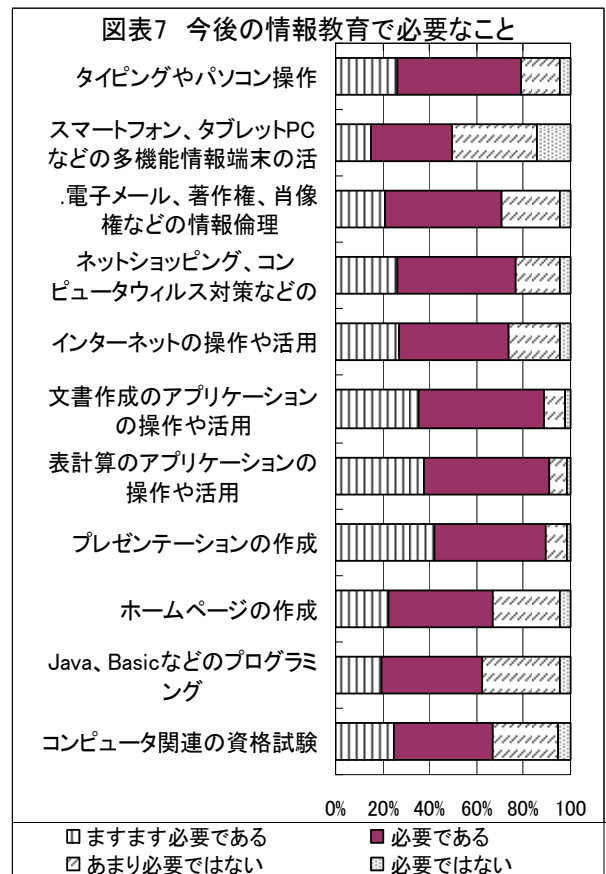
図表6で、「プログラミングの教育が少ない」と感じている学生が多かったとしても、その分野の情報教育を学生が必要と考えているかは別の問題である。そこで、学生が必要と考える情報教育の内容について、質問したのが図表7である。

「ますます必要である」と「必要である」を合わせた比率が多い質問項目は、「表計算のアプリケーションの操作や活用」(90.7%)、「プレゼンテーションの作成」(89.8%)「文書作成のアプリケーションの操作や活用」(89.0%)であった。

反対に「ますます必要である」と「必要である」を合わせた比率が少ない質問項目は、「スマートフォン、タブレットPCなどの多機能情報端末の活用」(49.6%)「Java、Basicなどのプログラミング」(68.8%)「ホームページの作成」(62.7%)であった。

「スマートフォン、タブレットPCなどの多機能情報端末の活用」についての情報教育の必要性は感じていないという結果となった。また、図表6では「プログラミングの教育が少ない」と回答が多かったが、文系大学生は、Java、Basicなどのプログラミン

グホームページの作成などの学ぶことの必要性はあまり感じていないようであった。



### 4. 誰が情報教育の必要性を感じているか

では、デジタル・デバイトの観点から、どういった文系大学生が情報教育を望んでいるのであろうか。それをあきらかにするために、図表4の「コンピュータ・リテラシー」のパソコンの習熟度と情報教育の必要性についての関係を分析する。

#### 4.1 パソコンの習熟度

文系大学生のパソコンの習熟度の違いを、図表4 コンピュータ・リテラシーの現状の質問8項目を用いて分類することにした。

質問ごとに「現在よくできる」=3点、「現在少しできる」=2点、「出来ない」=1点、「以前に習ったが今は出来ない」=1点、「したことがない」=1点としてウェイトづけを行い、551人の合計点を計算した。その結果、習熟度の最低は8点、最高は24点となった。

※ 合計人数が573人より少ないのは無回答があるからである。

図表8は、その合計得点を3つに区分し、習熟度—低群、中群、高群に分けた結果である。

図表8 習熟度によるグループ化

	人数	%
低群(8~15点)	179	32.5
中群(16~19点)	235	42.6
高群(20~24点)	137	24.9
合計	551	100.0

#### 4.2 パソコンの習熟度と情報教育の必要性の関係

大学での情報教育パソコン習熟度によって、情報教育に望むことは異なるのであろうか。それを検討したのが、図表9である。

以下の11の質問ごとの回答に対して、「ますます必要である」=4点、「必要である」=3点、「あまり必要ではない」=2点、「必要ではない」=1点として、平均値を計算した。

図表9 情報教育に望むことーパソコン習熟度別

	低群	中群	高群
タイピングやパソコン操作の教育	<b>3.04</b>	3.02	2.92
文書作成のアプリケーションの操作や活用の教育	3.16	<b>3.28</b>	3.20
表計算のアプリケーションの操作や活用の教育	3.15	<b>3.33</b>	3.30
インターネットの操作や活用の教育	2.93	<b>3.02</b>	2.86
プレゼンテーションの作成の教育	3.14	<b>3.43</b>	3.32
ホームページの作成の教育	2.79	2.85	<b>2.87</b>
Java、Basicなどのプログラミングの教育	2.69	2.80	<b>2.83</b>
スマートフォン、タブレットPCなどの多機能情報端末の活用の教育	<b>2.52</b>	2.48	2.49
電子メール、著作権、肖像権などの情報倫理の教育	2.83	<b>2.90</b>	2.87
ネットショッピング、コンピュータウィルス対策などのセキュリティ教育	2.93	3.01	<b>3.03</b>
コンピュータ関連の資格試験の教育	2.75	2.88	<b>2.97</b>

※ 下線は最も値の大きいもの

結果として、パソコンの習熟度が低い学生は、「タイピングやパソコン操作の教育」「スマートフォン、

タブレットPCなどの多機能情報端末の活用の教育」については3群で値が高かった。それに対して、「Java、Basicなどのプログラミングの教育」「ネットショッピング、コンピュータウィルス対策などのセキュリティ教育」「コンピュータ関連の資格試験の教育」については、習熟度の高い学生の方が情報教育に望んでいることが分かった。

文系大学生でも大学の学びに必須と思われる「文書作成のアプリケーションの操作や活用の教育」「表計算のアプリケーションの操作や活用の教育」「プレゼンテーションの作成の教育」については、習熟度一低群よりも中群の方が高いという結果となった。

上記のことから、習熟度一低群について、パソコン利活用の動機付けを含めた情報教育が必要であるという示唆が得られた。

#### 5. おわりに

パソコンの苦手な学生は、大学の学びに必須と思われる、文書作成のアプリケーション、表計算、プレゼンテーションの作成ソフトへの必要性の認識が低い傾向があることが分かった。

現在、大学での情報教育はパソコンが中心であるが、パソコンの習熟度が低い学生には、モバイルも含めた情報機器の操作などについての教育を感じている割合が高かった。パソコンの習熟度の低い学生は、情報リテラシー向上のための動機付けや、モバイル機器もふくめた、コンピュータ・リテラシーの向上の情報教育が必要とされていることが本調査から示唆された。

#### 参考文献

- (1) 兵庫ニューメディア推進協議会 平成22年度調査研究グループ 調査研究報告書『若年層の携帯電話利用とデジタルデバイドの関係に関する調査研究』(研究代表 飯嶋香織 研究メンバー 井内善臣 飯嶋香織 沖野光二 小西康生 杉本健三 中村あすか 堀尾正幸 山本誠次郎) 2011  
この調査では、自分専用のパソコンを所有か非所有によって、パソコンの利用頻度や習熟度に違いがあるという結果がえられた。パソコンを所有しない層の一部にはパソコンスキルが身につけていない者がいることが検証されている。
- (2) 兵庫ニューメディア推進協議会 平成23年度 兵庫ニューメディア推進協議会 調査研究報告書『若年層の携帯電話、スマートフォン及びパソコン利用と情報リテラシーとの関係に関する調査研究』(研究代表 飯嶋香織 研究メンバー 井内善臣 飯嶋香織 沖野光二 小西康生 杉本健三 中村あすか 堀尾正幸 山本誠次郎) 2011.

謝辞 本研究の一部については兵庫ニューメディア推進協議会からの助成を受けて行った調査データを用いた。ここに記して、謝意を表します。